

〈研究ノート〉

ボン教の世界観

小野田 俊 蔵

1. ボン教の三期
2. 後期ギュルボン 'gyur bon の世界観
3. 中期キャルボン 'kyar bon の世界観
4. 古期ドルボン brdol bon の世界観

1. ボン教の三期

トゥカン・ロサン・チューキニンマ（1737-1802）の著『一切宗義』の説明によれば、ボン教は三期に分けられる。まず、最初期のものを「ドルボン brdol bon 粗い出来上がりのボン」次を「キャルボン 'kyar bon 変化したボン」そして最後のものを「ギュルボン 'gyur bon 翻訳されたボン」と呼ぶ。御牧克巳氏の訳によるとそれぞれ「啓示のボン」「逸脱のボン」「改変のボン」となる。キャルボンの「変化」とは、ヤルルンの王ディクム・ツェンポの時に、カシミールとプルジャとシャンジュンから三人のボンを「デシェー dre bshed」を学ぶ為によんだことで生じたとトゥカンは説明する。第三期のギュルボンは仏教から多くを取り入れて変化したものと考えてよい。実際には吐蕃王朝によって禁止された禅と無上瑜伽タントラとの混交が最も顕著である。

2. 後期ギュルボン 'gyur bon の世界観

ギュルボンの世界観を構成する二つの要素は仏教におけるものと同じであって、明らかに仏教から移入されたものと看做しうる。すなわち、器世間としての須弥山説と有情世間としての三界説である。先ず須弥山説の基本構造は仏教と変りはないが、鳳凰（キュン）が周りを飛び交う如意樹（世界樹）のイメージはあるいはドルボンの時代から引き継がれたものかも知れない。

stong gsum stong gi 'jig rten na// tshang rgyung ri bdun rol mtsho bcas//

lcags ri khyud mo 'khor mo'i gling// gling bzhir gling phran nyi zla'i 'od//

dpag bsam ljon pa'i zil gnon khyung// mtho ste srid pa'i rtse mo man chad dang//

(三千大千世界 [の中] に七重の山脈と遊戲海。鉄圍山に囲まれた大地 [その周り
には] 四州と小州 [そこに] 日月 [の] 光 [りが降り注ぐ]。如意樹のまわりには
キュン [が飛び交う]。高きは有頂天から ...) (Snellgrove: p. 81)

欲界・色界・無色界の三界説は、Snellgrove の *Gzi brjid* の訳では、図のみあって詳細が分からなかったが、最近の研究により 14 世紀のボン教の学者 Tre ston rgyal mtshan dpal テトン・ギェルツェンペルにより著されたボン教の教義綱要書『ボンゴサルチェー *Bon sgo gsar byed*』にかなり詳細な説明があることを、御牧克巳氏が紹介した。

『ボンゴサルチェー』にみられる三界の構造

gzugs med khams

(無色界)

4. yod min med min skye mched (非有非無生処)

3. ci yang med pa (無所有処)

2. rnam shes mtha' yas (識無辺処)

1. nam mkha' mtha' yas (空無辺処)

gzugs khams

(色界)

17. 'og min gnam gyi lha (色究竟天)

(gnas rigs chen po bzhi) ↓

16. gya nom snang ba (善現) = mgon btsun phyra

15. shin du mthong ba (善見) = bar lha 'od gsal

14. mi gdung ba (無熱) = srid pa ye sangs

13. mi che ba (無煩) = srid pa gung sangs

(第四禪) 12. 'bras bu che ba (広果) bsam gtan bzhi pa'i lha

11. bsod nams bskyed (福生)

10. sprin med 'od (無雲)

(第三禪) 9. tshad med dge (無量淨) bsam gtan gsum pa'i lha

8. dge rgyas (遍広)

7. dge chung (少淨)

(第二禪) 6. tshad med 'od (無量光) bsam gtan gnyis pa'i lha

5. 'od chen (大光)

4. 'od chung (少光)
- (初禪) 3. tshangs pa 'bum khri (百千万梵)
- sam gtan dang po'i lha
2. tshanns chen (大梵)
1. tshangs chung (小梵)
- 'dod khams 6. gzhan 'phrul dbang byed (他化自在)
- (欲界) 5. 'phrul dga' (化樂)
4. dga' ldan (兜卒)
3. mtha' bral (夜摩)
2. sum cu rtsa gsum (三十三)
1. rgyal chen rigs bzhi (四大王) 6. 'dod lha (欲界の天)
5. lha min (阿修羅)
4. mi (人)
3. byor song (動物)
2. yi dwags (餓鬼)
1. dmyal ba (地獄)
0. bar do (中有)

3. 中期キャルボン 'kyar bon の世界観

キャルボンの世界観がどのようなものであったのかは正確には分からない。しかし教祖とされるシェンラブミボの生誕の地を語る伝承には、仏教の要素が少ないと思われる部分が存在する。そこに語られる山河の表現には明らかにカイラス周辺の自然が反映している所があり、これはヒンドゥーと共通するが、カイラス周辺を含むシャンシェン地域がボン教の故地であったことを考えると、どちらが起源であったかは簡単には判断出来ない。

「ウルモ・ユンリン」の様子を示す部分の伝承を以下に抜粋してみる。

地界は地殻から地底へむかって九層 (sa rim pa dgu) をなす。

天界は最初は九層 (gnam rim pa dgu) であったが、後に十三層に広がった。

「ウルモ・ユンリン (九層)」と呼ばれる世界の中心には、

ユンドゥン・グプツェ (g-yung drung dgu brtsegs) の峰がそびえている。

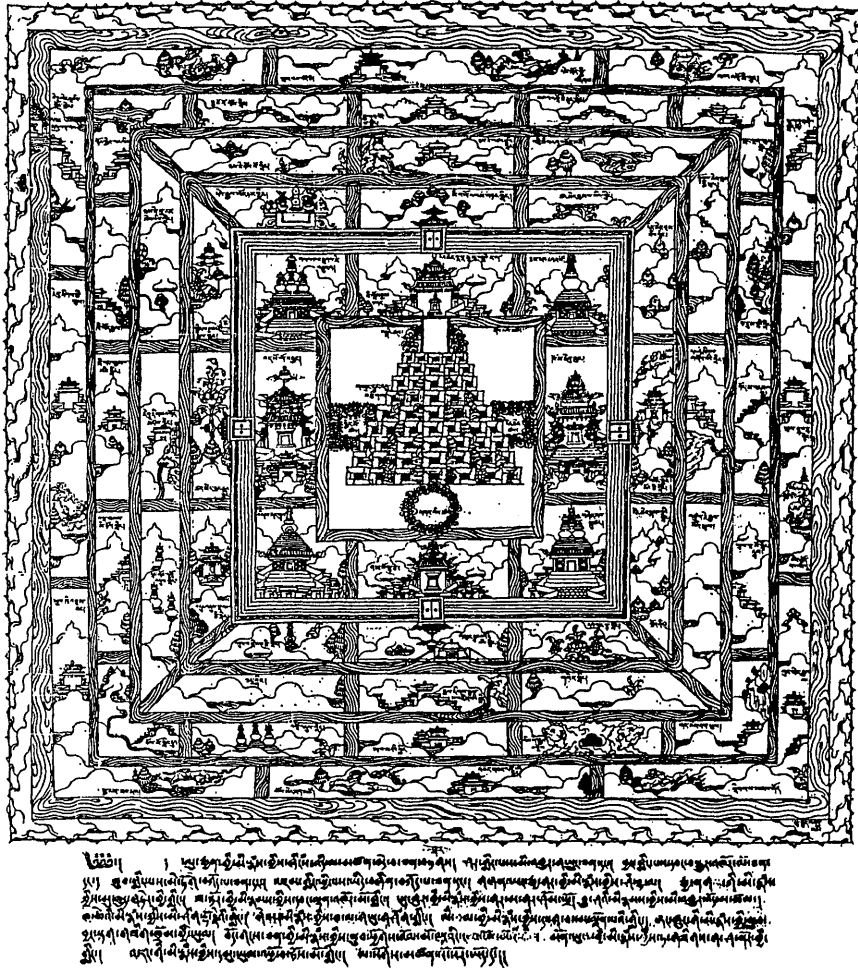
この山のふもとから四方に河川が流れ出ている。

獅子の形の岩窟から東方に流れるナラ (nara) 河、

馬の形の岩窟から北方に流れるパクシュ (pakshu) 河、

孔雀の形の岩窟から西方に流れるキムシャン (Kyim shang) 河、

象の形の岩窟から南方に流れるシンドゥ (Sindhu) 河である。



[Snellgrove: 1967] に付されたウルモユンリンの構造図 (Illust 23) (テンジンナムダク氏による素描)

ユンドゥン・グプツェの回りには多くの寺や都市が存在するが、
主要な箇所は八ヶ所で、

山の東にはシャムポ・ラツェ寺 sham po lha rtse

山の南にはシェンラブ生誕のパルポ・ソゲー宮 bar po so brgyad

山の西にはシェンラブの妻が子を産んだ

ティムン・ギェル宮 khri smon rgyal bzhad

山の北にはもうひとりの妻が子を産んだ

コンマ・ネウチュン宮 khong ma ne'u chung がある。

以上の四大主要地は内部地域（ナンリン nang gling）を占めている。

その外側には、12の都市からなる中間地域（パルリン bar gling）

その外側には、外部地域（ターリン mtha' gling）が広がっている。

「ウルモ・ユンリン」の三地域は、河川や湖によって区切られている。

周りには、「周囲に広がる海原」ムキュー・デルウェー・ギャムツォ mu khyud bdal
ba'i rgya mtsho があり、さらにその環海の周りはウェーソ・カンキラワ dbal so gang
kyi ra ba という雪峰にとり囲まれている。(Snellgrove: p. 91/ Karmay: p. 366)

4. 古期ドゥルボン brdol bon の世界観

ボン教の開祖とされるシェンラブミボ gshen rab mi bo の名前の意味は「完全な〔あるいは最も優れた〕シェンである偉大な人」である。彼はム族の父とチャ族の母を持つ人物であったと記録される。チベット語の bla ラ（ラマ bla ma のラ）は上（かみ）の意味を持ち lha ラ（ラサ lha sa のラ）は神（かみ）の意味を持つが、両者は元は同じ l を基字とする類語で、bla の b は現在では基字とみなされるが古代では添前字の b と同じ働きをしていたものと思われる。ヤルルン時代のボン教の様子を伝える敦煌文書には彼等（ムボン dmu bon とチャボン phya bon）の神は「御霊神 sku bla クラ」と呼ばれていたことは有名であるがこの言葉は神の意味で使われている。一般人の霊は「ラ bla」と呼ばれ、「ラネー bla gnas ラの拠り所」という使い方をされる。シェンと呼ばれる職能者によって行われた儀式の内、死者を弔う儀式では犠牲が重要な役目を果たしていたらしく、「不死の国」に送りどけるのは犠牲の馬等であったようだ。その道のりは険しくて多くの峠（七つあるいは九つ）があり容易には越せない (Pelliot 1194 等) ことから、葬儀では犠牲の動物に勇氣と力を持たせることが儀礼の

目的の主たるものであったようだ。羊やヤギは先導であって亡者が男性の場合は馬が、女性の場合はゾモ（牛とヤクの交配種）が用いられたという。（山口瑞鳳『敦煌胡語文献』p. 551; peiliot 1286, 1068 による）

peiliot 1136 には、葬儀の時の様子として

「厠の中をめぐり走らせて、米の新芽を食べさせ、砂糖黍の汁を口に灌いだ後、亡者と馬を絹のひもで縛り、馬の頭に鳥として〔の象徴〕キュンル khyung ru（鳳の角）をつける。....」（山口／定方訳 p. 552 に訳がある）

と記述されている。「馬の頭に鳥としてキュンル（鳳の角）をつける（Pelliot 1136 line 28: dbu la bya ru khyung ru ni btsugs）のはここでは犠牲としての馬であるが、それをまねた冠をボン教の司祭者がつける場合もある。ちなみに、シェンの名の由来を「犠牲を殺す人 gshed pa」と解釈する意見（R. A. スタン等）もある。

スタンは始祖伝説としての卵伝説のひとつをその著『チベットの文化』で紹介している。（山口／定方訳 p. 231）



[Hoffmann: 1950] に付されたボン教司祭の図 (Tafel 10)

まず、二羽の鳥がいた。この鳥たちの巢に十八個の卵があり、そのうち六つは白、六つは黄、六つは青であった。中央の六つの卵から人間が生ずる。そのとき三柱の鍛冶神も現われるが、三神がそれぞれ天の神（白）、地の神（黄）、地下の神（青）の三つの王国のいずれかに所属している。これら三柱の鍛冶神に、まんなかの王国から来た人間の鍛冶屋が一人加わる。

残念ながらスタンはその出典を明らかにしていないが、鍛冶屋が登場する始祖伝説はユーラシア中に数多く存在する。シャーマンはその角をつけて天上界へと飛翔するのであると考えられた。

一般にユーラシア中北部に拡がるシャーマニズムにおいては、世界は先ず大きく三つの世界に別れている。天上界と地上界、そして地下界である。普通の人間は地上界にいて、そこにいるもろもろの神霊とある種の交融をなしうるにすぎないが、シャーマンだけは神憑かりの状態にはいつて、天上界に昇り、あるいは地下界に降りることができるのである。

高車と称されるトルコ系の民族の始祖伝説には、高台から天の降臨を願う話が伝えられている。護雅夫氏の訳によってそれを見てみよう。

匈奴のある君主に二人の娘があった。彼女らの姿かたちがとても美しいので、国人たちはすべて、彼女らはこの世ならぬものである、と考えていた。その君主は「自分のこの娘たちをばどうしてこの世の人間どもに嫁がせえようか。天に与えよう」といつて、その国の北方、無人の地に高台をきずきその上に娘たちを置いて「天よ、みずから降臨してこれを迎えたまえ」と祈った。

（護雅夫『遊牧騎馬民族国家』p. 47）

ネパールの北西部に住むマガル人のシャーマン候補者は何時間を目隠しされたまま、木の上に固定された座席に座っていなければならない。この試練によって、シャーマンとして人々と天の世界とを媒介する能力があるか決定されるのであるという。（ホッパー p. 112）

トルコ系の民族の始祖伝説には、さらに続きがある。

高台の上の娘達は、三年の後その母の希望で降ろそうとしたが君主は許さず、そうこうしている間にさらに一年過ぎた。すると、一頭の年老いた狼がやってきて吠え

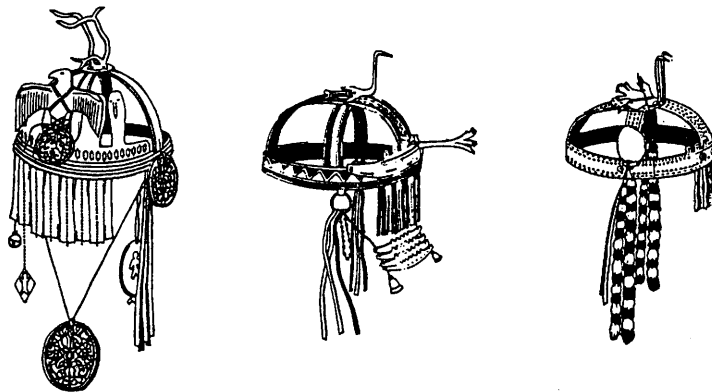
続け立ち去らなかった。二人の内の妹の方が、その狼を天の使いとみてその妻となり、子供を産んだ。その後その子孫が栄えて一国をなすにいたった。それが高車である。だからこの高車の人は好んで声を長くひきのばして歌を歌い、狼の吠える声に似せるのだ。

この始祖伝説はやがてチンギスの伝記にも取り入れられてモンゴルその他の北方諸民族でも語られるようになっていく。すなわち、「蒼き狼」の伝説である。

狼の伝説とともにトルコ系の民族にその端を発したと考えられている始祖伝説として鍛冶師の伝説がある。チンギスの子孫であるモンゴルの皇帝達は、その祖先の事蹟を記念するために、毎年の終わりに、鍛冶師などが、君主の面前で熱した鉄をきたえ、おごそかに上天に感謝する儀礼を行っていたという。チンギスカンの幼名であるテムジンは、トルコ語で鍛冶屋をあらわす「テムルジ」が訛ったもので、もともとは鍛冶を業としていた、という伝承がモンゴルにはあるという。鍛冶とシャーマンとの結びつきはさらに、シャーマンの鉄製の兜において顕著に見られる。

前述のスタンが引用する文献に伝えられる人間の鍛冶屋とは鍛冶の技術をもつシャーマンであったと考えてよい。また死者を送る際に「馬の頭に鳥として〔の象徴〕キュンル（鳳の角）をつける。」とある角は、シャーマンが天上界との間を行き来する際に頭に冠った鉄の角の兜とおそらくは同じ種類のものではあったのだろう。

アルタイ山脈中のパジリク古墳群の墓塚から発見された絨毯の柄には角を持った馬ともシャーマンともつかないものが描かれている。また、シャーマン太鼓に描かれた



〔Hoppal: 1994〕に付されたシャーマンの冠の図 (no. 148) (鳥のシンボルとトナカイの角は鉄製)

世界図で、異なる世界間の通路が描かれている例は枚挙に暇がない。

吐蕃時代の伝承によれば古代の神達の天上界との連絡は「ム綱」によっても行なわれたと考えていた。敦煌文書 (Pelliot 1287) の一部に、吐蕃王家の祖先であるディクム・ツェンポの治世をまとめた部分があるが、それをみると、王は普通の人と違って「デの御子 lde sras」であったので、天上界に行くことが出来たという。(山口『敦煌胡語文献』p. 458)

天上界との間を行き来するために彼は「頭上にある長い綱 dbu' 'breng zang yag」や「頭上の九段の階段 dbu' skas steng dgu」と呼ばれるものを持っていたというのである。頭の綱はここでは dbu' 'breng と綴られるが、「ム dmu の綱」とも綴られ、「gnam gyi 'ju thag 天の登り綱」とも呼ばれていたという。この「ム」は虹の色をもつ光りの柱の一種と考えられていた。ヤルルン王家の姻戚の四大部族 rus chen bzhi (= セセ / ム dmu / ドン ldong / トン stong) の一つである「ム族」の名からの連想から発した話しかも知れないが、「ムの法」といえばボン教を意味していた。

R. A. スタンは、その著『チベットの文化』の中で、大変示唆に富む説明をほどこしている。

聖山は世界の大黒柱、『天の柱』『地の釘』と呼ばれるが、言うまでもなく、柱や釘という言葉は家屋とか天幕から引き出されたものである。そして柱や釘は家の『土地神』でもある。天幕の中心はかまどで占められており、かまどのかたわらにしばしば柱がある。このかまどから立ちのぼる煙りは天幕の中心の真上に位置する屋根の穴から外へ出る。この穴からは光りも入る。家屋の場合は、この穴はある階から他の階への連絡口ともなる。穴に達するためには、階段ふうに溝を刻んだ一本の木の幹を梯子として用いる。(スタン p. 211 ; 山口訳 pp. 228-9)

また、山口瑞鳳氏は、前述のディクム・ツェンポの『年代記』の文章について、次のように解説する。(『チベット下』p. 153)

これを現代的に解釈すると、衆人監視のなかでエクスタシーに入って、心は天に昇り、神意を体し、地上に下って未来に対処する方向を民衆に与えることができたという意味になる。「デセー」は単に憑霊による媒介者ではなく、自ら地上に神の声を伝えて政事を行なう者である。これこそ北方のシャーマン、突厥(チュルク)の可汗などと性格を等しくするものであった。

〈参考文献〉

- Helmut Hoffmann (1950) *Quellen zur Geschichite der tibetischen Bon-Religion*, Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Kommission Beifranz Steiner Verlag GMBH, Wiesbaden.
- Mimaki, K. and Samten Karmay (1997) *Bon sgo gsal byed, Two Tibetan Manuscripts in Facsimile Edition of a Fourteenth Century Encyclopedia of Bonpo Doxography*, Bibliotheca Codicum Asiaticorum 13. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, The Toyo Bunko.
- Mimaki, K. (御牧克巳) (2003) 「チベット学における原典研究の意義——『宗義の水晶鏡』『ボン教』の翻訳をめぐって——, 『論集原典Ⅱ』 科研報告集 特定領域研究(A)118 「古典学の再構築」 A01 「原典」 班研究報告, pp. 123-143.
- Mihly Hoppal (1994) *Shamanen und Shamanismus*, Switzerland; ミハーイ・ホッパール著／村井翔訳 『シャーマニズムの世界』 青土社, 1998 年。
- Masao Mori (護雅夫) (昭和 42 年) 『遊牧騎馬民族国家』 講談社現代新書 116。
- R. A. Stein (1972) *Tibetan Civilization*, Tr. by Stapleton Driver, London; スタン著／山口瑞鳳・定方晟共訳 『チベットの文化』 岩波書店, 昭和 46 年。
- David Snellgrove (1967) *The Nine Ways of Bon*, Oxford University Press, London.
- Per Kvaerne (1985) *Tibet Bon Religion*, Institute of Religious Iconography State University Groningen, Leiden.
- Samten Karmay (昭和 58 年) 「ボン教」 『チベットの言語と文化』 北村甫教授退官記念論文集, 冬樹社。
- Yamaguchi Zuiho (山口瑞鳳) (昭和 60 年) 「ボン教文献」 『敦煌胡語文献』 大東出版社。
- (1988) 『チベット』 上下, 東京大学出版会。